お母さんのひきがえる

小川未明

青空文庫

かえるというものは、みんなおとなしいものですけれど、この大きなひきがえるは、たくさんの小さなひきがえるのお母さんであっただけに、いちばんおとなしいのでありました。

町の裏は、坂になって、細い道がつづいていました。道の両側はやぶになっていましたので、そこに、かえるはすんでいたのであります。去年のちょうどいまごろにも、このお母さんのかえるは、坂の通りへ出て、小さな子供たちのぴょんぴょんおもしろそうに飛ぶのをながめていました。

往来を歩く人は、みんなこのかえるを見てゆきました。

「かわいらしいかえるだこと、踏まないようにしてゆきましょうね。」と、女の子たちはいって、避けて歩いてゆきました。

お母さんのかえるは、ほんとうに、人間というものはしんせつなものだと思いました。

やがて、今年もその時分になったのです。五月雨時分の坂道は、じめじめとして、やぶの草木は、青々としげりました。お母さんのかえるも去年のように、道の上へ出ていました。

ある日のこと、この大きなかえるは、人間の住んでいる家は、どんなような有り様だろうと思いました。

「ひとつ、今日は見物にいってみましょう。」といって、のこのこ坂を下りて、町へやってきたのでした。

かえるの足は、のろかったから、町へきた時分は、もう、かれこれ晩方になっていました。

「まあ、一軒、一軒、歩いてみることにしよう。」と、大きなかえるは思いました。

人間というものは、みんなやさしいものだと思っていたかえるは、なにもほかのことを考えませんでした。すぐ、その一軒の入り口からはいりました。

その家は、米屋でありました。米屋のおじいさんは、なにか、黒い、大きなものがはいってきたと思って、よく見ますと、それは、ひきがえるでありましたから、

「まあ、まあ、こんなところへはいってきては困るじゃないか。さあ、出ておいで。」といって、おじいさんは、笑いながら、かえるを棒の先で、往来へ出してしまいました。

お母さんのひきがえるは、かくべつそれを悲しいとも思いませんでした。こんどは、隣の家へはいってゆきました。

隣の家は、炭屋でした。おかみさんが、冬の用意に、たどんを造っていましたが、ひきがえるがはいってくると、

「こんなところへはいってくると、真っ黒になってしまうよ。さあ、あっちへおゆき。」といって、そこにあったほうきで、かえるを往来の方へはき出すまねをしました。

お母さんのひきがえるは、これを悲しいとも思いませんでした。おとなしく、その家を出るとまた、そのつぎの隣の家の方へ歩いてゆきました。晩がたの空は晴れていました。かえるは、入り口からはいると、きれいな水があって、魚がたくさん泳いでいましたから、大喜びでい

きなり中へ飛び込みました。

「あっ。」といって、そこにいた子供たちは、みんな驚きました。その家は、金魚屋だったのです。金魚屋のおじいさんは、すぐにひきがえるを網ですくって、外の往来の上へぽんとほうり出しました。子供たちは、また、どっと笑いました。

お母さんのかえるは、自分の子供たちのことを思い出して、暗い坂の方へ帰ってゆきました。

――一九二六・六――

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　5」講談社
　　1977（昭和52）年3月10日第1刷発行
※表題は底本では、「お母《かあ》さんのひきがえる」となっています。
※初出時の表題は「お母さんの蟇蛙」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：雪森
2013年5月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お母さんのひきがえる

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/